第１章　調査研究の全体像

1　調査研究の背景と目的

介護過程の展開（個別介護計画等を活用した PDCA サイクル）は、利用者の自立の維持・向上、利用者の望む生活の実現をするために必要な「根拠に基づく介護実践」である。介護過程は介護福祉士養成カリキュラムなどの介護人材の育成において重要な科目であり、 介護福祉士の専門性の一つとして介護現場で実践することが期待されている。

一方で、令和3年度より始まった「科学的介護情報システム（LIFE）」（以下、「LIFE」という）は、アセスメント情報等のデータ登録及びフィードバックの活用を通じて、介護事業者におけるケアの質の向上を図る新たな取り組みである。LIFEの活用や推進において介護過程実践は重要であり、その担い手である介護福祉士及び介護職（以下、「介護福祉士等」という）の役割は大きい。

弊社では社会福祉推進事業において、令和2年度「介護現場における介護過程実践の実態調査及び効果検証に関する調査研究事業」を実施し、効果的な介護過程推進の要素及び介護福祉士等の役割を見出した。令和3年度「科学的介護情報システム（LIFE）を活用した介護過程実践に関する調査研究事業」では、LIFEを活用した介護過程実践の効果や影響及び令和2年度の残された課題について調査研究を実施した。また、令和4年度科学的介護情報システム（LIFE）を活用した介護過程実践に関する調査研究事業報告書」では、LIFEを活用した介護過程実践における介護福祉士等に必要な能力や実践力に対応した介護過程教育の教育内容の整理・検討を行った（令和 2 年度以降の報告書の詳細は、以下を参照）。

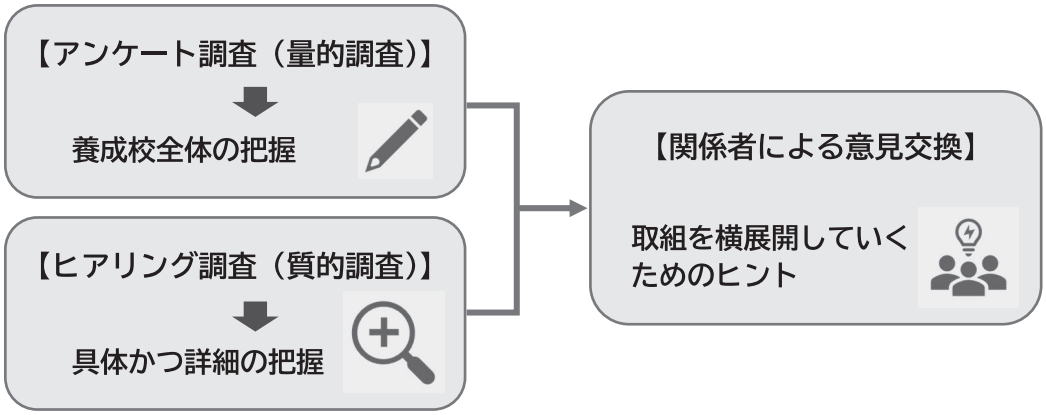
▶　https://www.comon.jp/dl/project.html

本年度は、介護福祉士養成校において、「根拠に基づく介護実践」の教育・授業がどのように行われているのか、LIFEを活用した介護過程実践の視点を介護福祉士養成校の「根拠に基づく介護実践」の教育・授業にどのようにコミットさせられるかを明らかにする。その上で、教育や授業の事例を見える化し、養成校において共有し、介護福祉士養成校における「根拠に基づく介護実践」の教育・授業の充実・深化を図ることを目的とする。

2　本調査研究の枠組みと調査研究方法

本調査研究では、根拠に基づく介護実践を教育するための取り組みや工夫、ツールや指標の実態を学校種別（教育課程別）に把握・分析するとともに、LIFEの取り組みを介護過程教育に取り入れることについて、その可能性や具体的な教育・授業例、留意点、工夫点などを把握することを目的に、**【アンケート調査（量的調査）】**及び**【ヒアリング調査（質的調査）】**を実施した。

また、これらの結果を踏まえ、LIFEの取り組みを介護過程教育に取り入れることに対する課題、課題解決のための取組や今後の可能性等について、**【関係者による意見交換】**の場を設け、取組を横展開していくためのヒントについての要点把握を行った。



次ページ以降では、**【アンケート調査（量的調査）】**、**【ヒアリング調査（質的調査）】**、**【関係者による意見交換】**について、その概要を記載する。

用語についての留意点

- ✓ 本調査研究では、介護福祉士養成校を調査対象としている。このことを背景に、アンケート調査の記述回答、ヒアリング調査や意見交換会における発言において「生徒」「学生」、「養成校」「養成施設」、「学習」「学修」などの表現がみられる。
- ✓ アンケート調査の記述回答、ヒアリング調査、意見交換会の結果においては、回答者がおかれている立場と考えを尊重し、表記は原文のとおりとしている。
- ✓ アンケート調査の質問文及びまとめ、ヒアリング調査のまとめ、本調査研究のまとめと考察においては、「学生」「養成校」で統一している。

（１）アンケート調査（量的調査）の実施概要

根拠に基づく介護実践を教育するための取り組みや工夫、ツールや指標の実態を学校種別（教育課程別）に把握・分析するとともに、LIFEの取り組みを介護過程教育に取り入れることについて、その可能性や具体的な教育・授業例、留意点、工夫点、課題などを把握するために、介護福祉士養成校を対象にアンケート調査を実施した。

本調査は、後述（2）ヒアリング調査（質的調査）のスクリーニングを兼ねるとともに、具体的事例としてまとめる際のポイント（視点）の論拠として活用することも目的としている。

本調査の結果データは、第2章に掲載している。

●名　　称：根拠に基づく介護実践を推進する教育に関する調査

●対　　象：介護福祉士養成校（全数調査）

●配布方法：郵送により送付

●回収方法：郵送、ウェブフォーム、エクセルダウンロードから回答者が選択し回答

●調査期間：令和５年１０月１８日～１１月１５日
締切後到着の調査票は対応が可能な範囲で集計の対象とした。
礼状兼督促のはがきを２回送付（１０月３０日、１１月７日）した。

●サンプルと回収：

	対象数	無効※	有効対象	回答数	回答率
福祉系高等学校	１１２	１	１１１	５９	５３.１%
専　門　学　校	１９０	１	１８９	４４	２３.２%
短　期　大　学	４８	０	４８	８	１６.６%
４ 年 制 大 学	５９	１	５８	１０	１７.２%
合　　計	４０９	３	４０６	１２１	２９.８%

無効※：募集停止や閉鎖等の連絡があった養成校

●調査協力：全国福祉高等学校長会様、日本介護福祉士養成施設協会様に、名簿提供についてご協力をいただいた。

●調査における配慮・留意点

・ＬＩＦＥについて知っていただくための説明書を調査票に添付した。

・①調査で得られた内容は安全措置を講じてデータの漏洩がないように管理・保管し、施設や回答者が特定できないよう統計処理すること、②調査への拒否があってもそのことで不利益が生じることはないこと、③目的外に利用しないこと、④回答にあたって合理的配慮が必要な場合は個別に対応する旨を明記した。

（２）ヒアリング調査（質的調査）の実施概要

アンケート調査の内容をより具体かつ詳細に把握するために、ヒアリング調査を実施した。ヒアリング調査の対象は、アンケート調査結果及び検討委員会での検討の結果をもとに有意に抽出をした。

本調査の結果データは、第3章に掲載している。

●対　　象：６か所の介護福祉士養成校（有意抽出）

●ヒアリング日時・対象・実施者：

日時		対象	実施者
1	令和５年 １２月５日（火） １４：００～	日本福祉大学 久世淳子先生 武田啓子先生 鈴木俊文先生	鈴木真智子氏（現地） 藤野裕子氏（現地） 相澤京美（現地） 下川玲子（現地）
2	令和６年 １月１２日（金） １３：３０～	和歌山ＹＭＣＡ国際福祉専門学校 嶋田直美先生	品川智則先生（リモート） 鈴木真智子氏（リモート） 藤野裕子氏（リモート） 相澤京美（現地） 下川玲子（現地）
3	令和６年 １月１５日（月） １３：００～	淑徳大学短期大学部 木田茂樹先生	野田由佳里先生（現地） 金山峰之氏（現地） 下川玲子（現地）
4	令和６年 １月１６日（火） ８：５０～	埼玉県立誠和福祉高等学校 中嶋芳乃先生 栗原真理江先生 大久保理沙先生	真田龍一先生（現地） 鈴木真智子氏（リモート） 金山峰之氏（現地） 下川玲子（現地）
5	令和６年 １月１７日（水） １４：４５～	大阪人間科学大学 時本ゆかり先生 水谷真弓先生 玉井美香先生	二瓶さやか先生（リモート） 鈴木真智子氏（リモート） 藤野裕子氏（リモート） 相澤京美（現地） 下川玲子（現地）
6	令和６年 ２月２１日（水） １３：００～	西九州大学 加藤稔子先生	井口健一郎先生（現地） 武田卓也先生（現地） 藤野裕子氏（リモート） 金山峰之氏（現地） 相澤京美（現地） 下川玲子（現地）

●実施方法：対面とリモートのハイブリッドによる実施とした。
本調査研究事業の検討委員及びオブザーバー（具体的詳細は（４）に記載）、事務局により実施した。

●そ の 他：埼玉県立誠和福祉高等学校、日本福祉大学、大阪人間科学大学については介護過程の授業についても見学を実施した。

●調査における配慮・留意点
・事前にヒアリングガイドを送付して、目的やヒアリング内容について情報の共有を図った。
・①ヒアリングは記録のため録画・録音をすること、②目的外では利用しないこと、③報告書の掲載にあたっては個人情報に配慮するとともに、事前に対象者に内容の確認をすることをヒアリングガイドに明記した。

（３）関係者による意見交換の実施

養成校の教員の意見をより詳細に把握するとともに、アンケート調査やヒアリング調査では把握が難しい具体的なLIFEの活用視点等を明らかにするため、養成校教員による意見交換を行った。

内容の詳細は、第4章に掲載している。

●参 加 者：

井川淳史氏	聖隷クリストファー大学　社会福祉学部　准教授
井口健一郎氏	社会福祉法人小田原福祉会　理事 特別養護老人ホーム潤生園　施設長
真田龍一氏	全国福祉高等学校長会　事務局長
品川智則氏	東京ＹＭＣＡ医療福祉専門学校　介護福祉科　専任教員
鈴木俊文氏	静岡県立大学　短期大学部　社会福祉学部　教授
武田卓也氏（司会）	大阪人間科学大学　人間科学部　教授
金山峰之氏	オブザーバー

●日　　時：令和６年３月１日（金）１８：００～２０：００

●実施方法：リモートによる実施

（４）検討体制

以下の学識経験者、職能団体、事業者団体からの推薦者で構成される検討委員会を設置し、調査に関する方法及び内容の検討・精査・修正等に関する助言、調査結果を踏まえた今後の提言について検討を行った。

検討委員会開催は全てリモート実施とした。

検討委員会委員（５０音順）

役職	所属等	氏名（敬称略）
委　員	社会福祉法人小田原福祉会　理事 特別養護老人ホーム潤生園　施設長	井口健一郎
委　員	山梨県立大学　人間福祉学部　准教授	伊藤　健次
委　員	公益社団法人日本介護福祉士会　副会長 社会福祉法人不動園天ケ瀬苑デイサービスセンター　施設長	柏本　英子
委　員	全国福祉高等学校長会　事務局長	真田　龍一
委　員	東京 YMCA 医療福祉専門学校　介護福祉科　専任教員	品川　智則
委　員	日本福祉大学　健康科学部　教授	武田　啓子
委員長	大阪人間科学大学　人間科学部　教授	武田　卓也
委　員	十文字学園女子大学　人間生活学部　准教授	二瓶さやか
委　員	公益社団法人日本介護福祉士養成施設協会　理事 聖隷クリストファー大学　社会福祉学部　教授	野田由佳里

オブザーバー

所属等	氏名（敬称略）
厚生労働省　社会・援護局　福祉基盤課　福祉人材確保対策室 介護福祉専門官	鈴木真智子
厚生労働省　社会・援護局　福祉基盤課　福祉人材確保対策室 介護人材定着促進専門官	藤野　裕子

なお、調査実施及び調査結果の分析については、金山峰之氏（ケアソーシャルワーク研究所）に協力をいただいた。

（５）調査研究の経過

経過	内容
第１回検討委員会 令和５年８月２８日（月）１６：００～ ｚｏｏｍ	１．挨 拶 ２．委員紹介 ３．協議事項 （１）令和５年度社会福祉推進事業 ・調査研究事業概要について ・スケジュールについて （２）アンケート調査について （３）その他
アンケート調査の実施 令和５年１０月１８日～１１月１５日	郵送配布 紙面・ウェブフォーム・エクセルによる回答
第２回検討委員会 令和５年１１月２８日（火）１６：００～ ｚｏｏｍ	１．アンケート調査結果のその時点でのご報告 ２．ヒアリング等候補先の検討と決定 ３．ヒアリングガイド案検討 ４．座談会企画案検討 ５．その他（今後のスケジュール等）
ヒアリング調査の実施１ 令和５年１２月５日（火） １４：００～	日本福祉大学
ヒアリング調査の実施２ 令和６年１月１２日（金） １３：３０～	和歌山ＹＭＣＡ国際福祉専門学校
ヒアリング調査の実施３ 令和６年１月１５日（月） １３：００～	淑徳大学短期大学部
ヒアリング調査の実施４ 令和６年１月１６日（火） ８：５０～	埼玉県立誠和福祉高等学校
ヒアリング調査の実施５ 令和６年１月１７日（水） １４：４５～	大阪人間科学大学
第３回検討委員会 令和５年１月２２日（月）１６：００～ ｚｏｏｍ	１．ヒアリング調査進捗報告について ２．アンケート調査結果について ３．報告書構成案について
ヒアリング調査の実施６ 令和６年２月２１日（水） １３：００～	西九州大学
第４回検討委員会 令和６年２月１９日（月）１６：００～ ｚｏｏｍ	１．ヒアリング調査結果の検討 ２．座談会について ３．その他
関係者による意見交換（座談会） 令和６年３月１日（金） １８：００～ ｚｏｏｍ	ＬＩＦＥの視点・要素を活用した介護過程教育への期待～根拠に基づく介護実践につながる介護過程教育を推進するために～
第５回検討委員会 令和６年３月１２日（火）１６：００～ ｚｏｏｍ	１．報告書（案）について ２．その他

3　調査研究の総括

（1）アンケート調査（量的調査）のまとめ

アンケート調査の構成としては、「①現在の介護過程教育における教員の認識や工夫、ツール・指標」「②介護過程教育における LIFE の位置付けや実際、認識等」「③介護過程教育において LIFE を用いることの課題」の大きく 3 つとなっている。

それぞれの結果の概要について、②③は表を用いて総括する。調査結果の詳細については、第2章に掲載している。

①現在の介護過程教育における教員の認識や工夫、ツール・指標

■介護過程について（Q7）

介護過程の定義や意義・目的について尋ねたところ、「本人らしい生活・人生のため」「利用者のための実践」といった利用者にとって必要なものであるという認識を示す回答が多かった。次いで、「介護福祉の原則の実践のため」「専門職としての支援のため」といった、専門職として介護福祉の原則や理念を実践するものであるという認識が示された。

■根拠に基づくアセスメントについて（Q8）

アセスメントとは情報収集、解釈・関連付け・統合化、課題の明確化であるといった回答が多く、一定の共通認識が浸透していることがわかった。その中で多角的な視点や専門的知識技術を用いること、科学的根拠に基づくことや説明できるといった点の重要性が認識されていた。

アセスメントの教育では、既存・オリジナルを含むアセスメントシートや、実習受け持ち利用者や卒業生の事例などを用いるといった回答が多く、また ICF を筆頭に、各種指標などを用いながら教育を行っているという回答がみられた。また、介護過程最初のステップでつまずかないよう、学生同士や教員といった身近な人を題材にした情報収集や、段階的に情報量を増やすといった工夫、学生同士の対話や意見交換から他者との違いを自覚できるように工夫し、多角的に物事を捉える力を養うプログラムを取り入れているといった回答がみられた。

■根拠に基づく計画について（Q9）

計画とはアセスメントから得られた結果が反映されているものであり、利用者の望む生活への道筋が反映されていることや、チームで統一的なケアを行うためのもの、説明責任を果たす実際的手段であるという認識がみられた。

計画の教育ではアセスメント段階で精緻な取り組みを行い、計画として精度を高めること、具体的で達成可能な目標を設定すること、計画が利用者のためのものであるという意識付けをす

ることなどに重点が置かれていた。これに加え、言語化に苦手意識を持つ学生が計画を書き表せるよう、動画や定型文の例示、5W1Hのフレームワークなどの手順によって取り組みやすい工夫がなされていることがみえてきた。

■根拠に基づく実施について（Q10）

実施とはアセスメントや計画のプロセスを引き継ぎ、実際に行われることであり、チームで統一して行えるものといった回答が多くあった。これに加え、実際の利用者の状態に応じて介護福祉の原則や視点・技術に基づいて行うことや、実施内容を記録・評価して計画を修正していく次のステップにつなげるプロセスとしての認識がみられた。

実施の教育では、学内でのロールプレイや事例検討などがあげられたが、多くは実習を通じて実際の利用者への関わりをとおして学びをすすめているという回答が多かった。そのため、教科書や動画教材などを用いつつも、比重としては実習記録や実習指導者の助言など実習施設で得られるものを教材としている傾向がみえてきた。

■根拠に基づく評価について（Q11）

評価とは計画に記した目標の達成度を明らかにするという回答が最も多く、それらは立案した評価基準に基づいて行われるという回答と連動していた。他には、アセスメントから続く支援プロセスの妥当性の確認、記録や利用者の反応を踏まえて計画の見直しなど、次の介護過程へとつなげるものであるという認識がみられた。

評価の教育では、実習で実施した事柄を踏まえて、実習中や実習後に振り返ることで評価を体験させているという回答が多かった。その中では、主観的で短絡的な評価にならないよう、客観的な情報と評価基準を照らし合わせて総合的に評価させるといった回答が多かった。また、LIFE に関連する評価項目など、様々な評価指標が用いられているということも結果からみえてきた。

②介護過程教育における LIFE の位置付けや実際、認識等

LIFE を介護過程教育の中でどのように活用できるかを尋ねたところ（Q15）、介護過程の各プロセス段階において根拠ある介護過程実践のために活用できること、介護現場における標準的な実践を理解することの促進につなげられる可能性などがあげられた。

一方で、LIFE への理解やイメージが持てないという理由から、具体的に教育の中で活用することは想定できないという回答も一定数みられた。

大項目	中項目
根拠ある介護過程実践のための活用	介護過程の各段階における根拠付として活用
	情報収集の手段として活用
	実習中の取り組みの評価に活用
	他職種連携の理解につながる
標準的な実践の取り組みの理解促進	現場の実践事例や標準事例として活用
	現場の実践を知る一助となる
	介護技術コンテスト等の事例として活用
活用の想定は難しい	想定できない

次に LIFE を授業で取り入れる効果について尋ねたところ（Q16）、「根拠ある介護過程実践に寄与する」といった回答が最も多く、次いで「養成校と現場のつながりが強くなる」という回答が多かった。学生が実際の現場実践をイメージできていないという課題は一定程度あるようで、養成校で習ったことと実習における実際とのギャップを埋めてくれる可能性が LIFE にはあると考える回答があった。また、実習指導巡回時に教員と学生、学校（教員と学生）と実習施設の間に共通言語ができることで、養成校と実習施設の指導に一貫性が生まれる可能性が感じられるという回答があげられた。

さらに、養成校を卒業して現場で働くことになった時に役に立つこと、介護現場における介護の質が高まるなどの声が聞かれた。

大項目	中項目
根拠ある介護過程実践に寄与	科学的根拠に基づく介護実践の重要性に気付ける
	より広い視野でアセスメントができる
	根拠ある計画立案につながる
	根拠に基づいた評価につながる
	介護過程の理解につながる
	学生の視点や知識に寄与する
養成校と現場のつながりが強くなる	実際の現場の実践事例をイメージしやすくなる
	学校と実習先の指導に一貫性が生まれる
	現場に出た際に役立つ
介護現場への寄与	多職種チーム連携につながる
	現場の介護の質が高まる
その他	介護の専門性につながる

学生が LIFE を学ぶ必要があると考える理由については（Q18）、介護過程教育における LIFE の活用は総じて学生にとって将来的に必要なものであり、専門性を高め、根拠ある介護過程実践につながる可能性があるという認識が教員の中で一定数あった。

大項目	中項目
将来的に必要なものだから	現場で実際に導入が進むものは理解しておく必要があるため
	介護現場への就職において必要になってくるため
	現場と養成校で同じものを理解しておくべきだから
専門性を高め、根拠ある介護過程実践につながるため	介護福祉士としての専門性を高めていくために必要だから
	幅広い視点や気付きの機会につながるため
	根拠に基づいた介護実践を行う上で必要だから
その他の必要性	学びの意欲向上につながるため
	ICT の活用、主体的に情報を入手する経験は必要であるため
	ケアの差が生じにくく、介護の質にばらつきがなくなるため
	国が推進しているから
	ICT の活用は今後必要な社会になっていくため
	介護を学ぶ上では身につけるべき考え方だから
	実践現場の全国的なアクションを理解することは介護福祉士の使命感育成につながるため

③介護過程教育において LIFE を用いることの課題（Q17）

【授業展開の課題】という点においては LIFE の特徴を理解したカリキュラム構成への課題が多くの教員からあげられた。LIFE に対する教員の理解が十分とはいえない中で、既存カリキュラムと調整しながら、かつ限られたコマ数であえて活用していくということについてはハードルを感じている意見がみられた。

また、LIFE を授業で活用する場合、現状のシステムは介護事業者向けとなっており、養成校で使えるものではないこと、コンテンツや事例が入手しにくいこと、中にはインターネット環境などの整備にハードルがあるという回答もあった。

大項目	中項目
LIFE の特徴を理解したカリキュラム構成	LIFE の理解が必要
	既存カリキュラムと調整しながらの導入検討
	時間数が限られている

大項目	中項目
学びの環境に関する課題	理解を深める事例や教材が必要
	学びの環境整備の課題
学ぶ力	学生の学ぶ力
	LIFE 以外の情報も活用すること
その他	個人情報の取扱い

授業への導入に際しての**【教員側の課題】**としては LIFE 自体の理解や利用経験がないこと、LIFE を知る機会や時間がないという課題に多くの回答があった。介護現場の実務経験がまったくない、長年実践から離れているなど、教員の経験に起因する課題もあげられていた。

そのほか、学内で他教員、他科目との連携といった学内の課題などもあげられていた。

大項目	中項目
LIFE の実際を知り理解すること	LIFE に関する知識、理解不足
	LIFE の実用が未経験であること
	LIFE を知る機会や時間がない
	導入現場を理解する必要
学内の調整等における課題	教員間での連携、共通理解
	カリキュラム等の検討
教員の能力や経験値	教員の能力や経験値

【学生の状況による課題】としては、習熟ペースが異なる学生や、多様な背景を持つ学生の学びの環境の整備、支援に関する課題が多く回答されていた。今現在の教育内容にさらに新しいことを導入することが、学生の負担となるという不安もあげられていた。

また、LIFE の導入によって学生の考える力が育たなくなるといった意見や、学習環境や教材の整備が進んでいないことも課題としてあがっていた。

大項目	中項目
学生の能力に関する課題	習熟ペースの差への配慮
	多様な背景を持つ学生への配慮（留学生など）
	根拠ある介護過程実践に必要な基本的力
	利用者の思いなどを把握する力
	習得に要する時間的課題
	学生の考える力が育たない危険

大項目	中項目
学び促進のための環境的課題	学びの環境の課題
	習熟促進のための教材

最後に LIFE を介護過程教育に取り入れていくにあたっての**【その他の課題】**について尋ねたところ、LIFE 自体が養成校や現場で浸透し、様々な事例や教材が必要であるという回答がみられた。また、LIFE を介護福祉士の業務や介護過程の中でどのように位置付け、取り入れていくかという大きな意味でのコンセンサスが十分でないこと、LIFE のシステムやフィードバックの質の向上などの必要性が課題としてあげられていた。

中項目
LIFE が広く認知され浸透すること
介護福祉士の業務と LIFE のかかわり
教授するための教材
具体的な事例
実習先との連携
養成校に内在する様々な課題
その他（フィードバック内容の精査、事例の個人情報保護について等）

（2）ヒアリング調査（質的調査）のまとめ

ヒアリング調査の結果は、「①介護過程教育の課題等」「②介護過程の授業の工夫」「③LIFEに関する教育の現状」「④教育にLIFEを活用する効果」「⑤LIFEを教育に活用するにあたっての課題」の5つでまとめている。

以下では、それぞれの結果の概要について総括する。調査結果の詳細については、第3章に掲載している。

①介護過程教育の課題等

介護過程教育の課題等として、ヒアリング対象となった養成校が共通してあげている課題はアセスメント及び評価に関する課題である。

アセスメントに関する課題として「アセスメントの理解にバラつき」「できる・している活動が曖昧」「情報の解釈、関連付け、統合化が苦手」、評価に関する課題として「評価に関する教授が不十分」などがある。また、他科目の知識応用の課題として「他科目の知識を介護過程につなげるのが難しい」、説明・言語化の課題として「説明できる力が弱い」などの課題があげられている。

上記は、過去の介護過程実践にかかる調査研究※において明らかにされた課題とも共通するものである。（※https://www.comon.jp/dl/project.html）

大項目	中項目
アセスメントの課題	アセスメントの理解にバラつき
	支援やサービスを考えがち
	心身機能・身体構造の理解が苦手
	優先順位が決められない
	できる・している活動が曖昧
	できる活動が難しい
	情報の解釈、関連付け、統合が苦手
計画・実践の課題	収集した情報を計画に生かせない
	情報を活動・参加につなげる力が弱い
	レクレーションに偏る
評価の課題	評価に関する教授が不十分
説明・言語化の課題	説明する力が必要
	言語化が苦手
他科目の知識応用の課題	他科目の知識を介護過程につなげるのが難しい
事例教材不足	介護過程の事例教材不足
その他	リアル事例で情報や知識が使えない
	数値を読み解く力
	リーダー教育

②介護過程の授業の工夫

介護過程教育における授業の工夫や留意点等について、ヒアリング対象の養成校では環境整備や指導方法の工夫など、様々な取り組みがなされていた。教員体制（専任、複数体制）を整え、事例の工夫、視覚的な理解促進、個別指導とグループワークの効果的展開など、一人ひとりの底上げを図る丁寧な教授がなされていた。

大項目	中項目
教員体制	教員体制（専任、複数体制）
事例の効果的活用	実際の事例
	実習のフィードバック
	移動介助などの理解しやすい事例
	事例の工夫（他科目と同じ事例の利用等）
	食事と移動の事例
関連図作成による構造的理解	関連図作成による理解
文章化による理解	文章化による理解
指導方法	アセスメントの順番を工夫
	繰り返しの学び
	個人・グループワークでの気付き
	個別指導
その他	チェックリスト

③LIFEに関する教育の現状

LIFE に関する教育の現状については、授業の中で制度の紹介、導入の目的を説明をするにとどまっているという状況がある一方で、「介護現場の人が授業で説明」するなど現場との連携による先進的な取り組みがみられた。

また、「副教材でLIFEをとりあげている」という動きもみられた。

大項目	中項目
制度や全体像の理解	授業の中で触れている
	副教材でLIFEをとりあげている
介護現場と連携	介護現場の人が授業で説明

④教育にLIFEを活用する効果

教育にLIFEを活用する効果は、ヒアリング対象校から、多くの前向きな意見があげられた。まずは①であげた課題に対応する内容として、アセスメントへの寄与、評価への寄与がある。標準や明確化という言葉に表れているように、見える化された共通の視点を有することがアセスメントや評価に寄与するのではないかという期待となっている。

さらには教育全体への効果として、「LIFE が現場と教育の共通ツール」になり、現場との連携を進めるなどにも言及する意見が出されている。

大項目	中項目
アセスメントへの寄与	アセスメントの向上
	アセスメントポイント明確化
	できる・している活動の明確化
	ADL を指標化
	情報の解釈の補完
	情報を結び付ける教材となる
	活動、参加の向上のための視点
	情報の解釈を補填
	情報の見える化
	情報収集のツール
	情報収集の標準化
評価への寄与	具体的な評価につながる経験
	評価しやすい
	評価に LIFE を活用
PDCA への寄与	アセスメント～評価の一連性
変化への気付き、支援の変更への寄与	変化をキャッチする
	気付きやすい、理解しやすい
	支援を見直すきっかけ
	リスクの予測
教育の全体への寄与	利用者情報の共有により教育の場で指導しやすくなる
	LIFE が現場と教育の共通ツール
	いろいろなデータを見る
	多文化でも共有しやすい
	バックグラウンドが違う教員の教育の均質化
	客観的に伝わりやすい
	具体的イメージがつきやすい
	文章化による理解につながる
	思考力の向上
	根拠につながりやすい

大項目	中項目
介護過程をよりよくするツール	LIFE を意識すると利用者主体につながりやすい
	数字で測りやすいデータを効果的活用
	介護過程をよりよくするツール
多職種連携	多職種との連携に必要
チーム形成	チーム形成につながる
その他	利用者の生活の質の向上
	生産性の向上

⑤LIFEを教育に活用するにあたっての課題

LIFEを教育に活用するにあたっての課題については、「LIFE によるデータの蓄積と介護過程教育内容の整理」や「数字では表せない内容との精査」（QOL やご利用者の意向等）など、LIFEの特徴を生かしつつ、それを既存の介護過程教育にどう生かしていくのかという整理が不十分であること、さらには将来的に介護福祉士が「リーダーとして LIFE を使いこなす教育」が課題としてあげられた。

その前提として、そもそも教員が LIFE に触れたことがない、十分に理解できていないという指摘、LIFEは介護現場に広がっていないのではないか、実習担当者が理解できていないのではといった介護現場との連携の課題、介護過程教育に生かせるLIFE事例確保へのハードル、LIFEに関連する教材開発も課題としてみえてきた。さらに、現場で LIFE のフィードバックが広がった際には、フィードバックを具体的にどのように介護過程教育にコミットさせていくかという点も今後の課題としてあげられていた。

大項目	中項目
教育内容	LIFE ありきという認識を助長させない
	使用している書式の見直し、再考が必要
	データを読む力をどうつけるか
	数字では表せない内容との精査
	介護過程と LIFE で必要な情報が一致しない
	LIFE の蓄積と介護過程教育内容の整理
	リーダーとして LIFE を使いこなす教育
現場と養成校の連携	LIFE の目的を現場と教員が共有
	現場・介護実習との連携
教員の理解	LIFE を活用する教員の力量
	教員の共通認識
事例	LIFE の個人フィードバックの活用
	実際の LIFE のシミュレーションが必要
	LIFE の具体的事例が必要

大項目	中項目
教材	LIFE を用いた教材が必要
	動画教材が必要
	副教材
	有効活用のための情報共有のあり方
その他	導入効果の明確化が必要
	その他

（３）本調査研究のまとめと考察

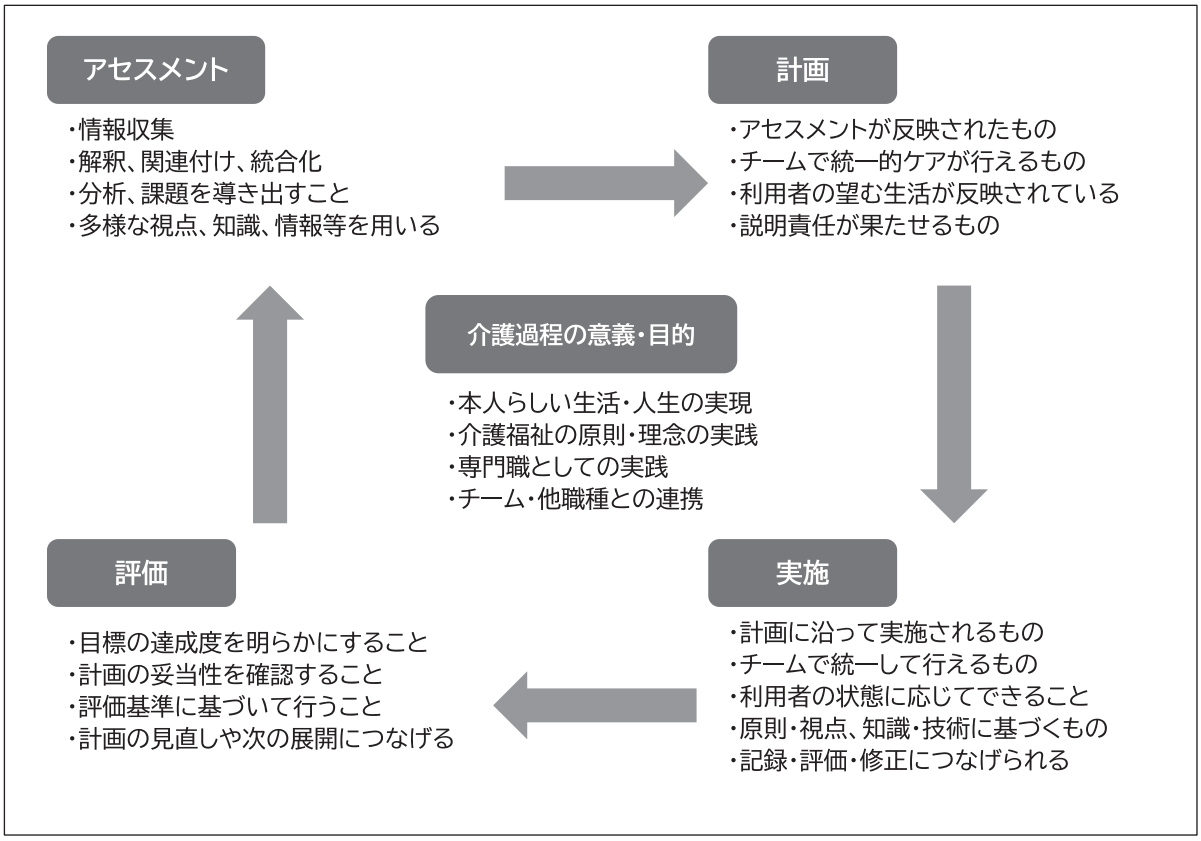
①教育現場における介護過程と介護過程教育の現状と課題、取り組みについて

介護過程が介護福祉士養成教育の正式なカリキュラムとして位置付けられて以降、教育現場では多様な取り組みと創意工夫を行い、学生への指導が行われてきており、LIFE という新たなシステムが介護現場に導入される以前から、根拠に基づく科学的介護実践のベースとなるのは介護過程だと位置付けられてきた。

本調査研究では、介護過程は利用者が望む暮らしの実現、そして利用者が社会の一員として尊厳と自立した日常生活を享受するための手段であり実践であり、介護福祉士が専門職である所以の一つとして教育現場では受け止められていることがみえてきた。

まず、介護過程とは何か、また介護過程を構成する各プロセス段階の意義とは何かについては下図のとおり、概ね共通の認識が教育現場に浸透していることが抽出された。こうした教員の共通認識は専門職養成における教育の標準化として重要な点である。

介護過程教育における介護過程の認識



本調査研究では、介護過程を介護福祉士の重要な専門性の柱であると位置付け、他の専門職種の教員や外部講師、実習施設等と連携しながら、様々な教授の工夫や取り組みを行っている様子が伺えた。こうした取り組みの工夫や手段のまとめについては下図のとおりである。

介護過程教育における教育の工夫や手段

アセスメント

・イメージや背景、知識を身につける
・徐々にアセスメントに慣れる
・情報を客観的に捉え根拠づける力を育てる
・アセスメント時の視点を養う
・既存・オリジナルアセスメントシート活用
・テキスト、事例の活用
・実習利用者情報の活用
・ICF などの各種フレームや評価指標の活用
・介護福祉に関する原則、視点の教授　など

計画

・より精度の高い計画立案のための工夫
・計画を書けるようにする工夫
・計画の意義を伝える
・計画立案機会としての実習
・各種計画書の活用
・教科書、書籍の活用
・実習先の指導
・過去の事例の活用　など

実施

・実習を通じた学び
・学内での実施機会を設ける
・根拠と記録の重要性を指導する
・教科書の活用
・動画、映像教材の活用
・実習を通じた教育
・記録の指導
・事例研究　など

評価

・実習を通じて評価を学ぶ
・客観的で根拠を持った評価
・教科書の活用
・各種評価様式の活用
・実習を通じたツールの活用
・事例発表会　など

介護過程最初のステップであるアセスメントでは様々な工夫や取り組みがあげられていたこと、実習と密な連携を必要とする実施や評価での工夫など教育現場での苦心が伺えた。特にアクティブラーニングの取り組みへの工夫は調査の各所にみられた。また、ICT を活用して、これまでの手書きから、パソコンやタブレットなどを使いながらより良い学びの環境を整えて、習熟効果や指導時間の確保に努める取り組みも伺えた。これらの工夫や取り組みは、現在の教育や現場実践の実態に則したものであり、学生の介護過程に関する学びの環境をより良いものにしていると考えられる。

一方、こうした工夫や取り組みの背景には、より質の高い教育実践を目指すということに加えて、以下のような課題への対応という面もあると考えられる。

下図は本調査研究全体から見えてきた、介護過程教育における課題をまとめたものである。課題に通底していることは、習熟ペースや多様な背景を持つ学生に対して、教員や学校側がより一層の環境整備や創意工夫が求められているという課題である。介護過程という介護福祉士の専門性の根幹を成すものの習得には、他科目や実習など養成カリキュラムの知識技術、倫理や学びを導入し、かつ継続的な反復トレーニングが求められる。

根拠に基づく介護実践を推進していく上でも、こうした課題やそれに対する各養成校の取り組みや成功例が広がり、共有されることが望まれる。

介護過程教育における課題

根拠を伴う情報を収集する力の教育
・アセスメントの理解にばらつき
・できる・している活動が曖昧

言葉として表現する力の教育
・言語化が苦手
・説明できる力が必要

専門的知識や視点から情報の意味づけをする力の教育
・他科目の知識を介護過程に繋げる力
・心身機能・身体構造の理解が苦手
・支援やサービスを考えがち

他科目で学んだ知識や技術を活かして計画立てたことを実施する力の教育
・アセスメントを計画に落とせない
・計画と実施がつながらない

情報からニーズ・課題を導き出す力の教育
・情報の解釈、関連付け、統合化が苦手
・情報を活動・参加につなげる力が弱い

評価に関する教授が十分にできていない
・評価に関する教授が不十分
・評価に十分な時間が割けない

②介護過程教育現場における LIFE の活用効果について

ここまで、介護福祉士養成校における介護過程教育における取り組み・工夫と課題について見てきた。ここからは、根拠に基づく介護実践を促進する上で、介護過程教育に LIFE を活用することの効果や想定される価値、活用にあたっての課題について整理を行う。

次の図は本調査研究で得られた介護過程教育現場に LIFE を活用する効果をまとめたものである。これらからは先にあげられていた、介護過程教育や養成校の内在的な課題に向き合う上で一定の効果が期待されることが見えてくる。

介護過程教育に LIFE を活用する効果

アセスメント

・アセスメントの向上
・アセスメントポイント明確化
・情報収集の標準化
・できる・している活動の明確化
・活動、参加の向上のための視点
・情報の解釈を補填できる可能性
・考察力が向上する
・データを読むことに慣れる
・情報の見える化
・情報を結びつける教材となる
・数字で測りやすいデータを効果的活用
・根拠と LIFE を関連付ける　など

PDCA

・アセスメント～評価の一連の流れ
・評価の視点が判りやすい
・評価に LIFE を活用できる
・具体的な評価につながる経験
・変化をキャッチする
・支援を見直すきっかけ
・記録を補填するツール
・リスクの予測　など

教育の方法や質

・バックグラウンドが違う教員の教育の均質化
・利用者情報の共有により教育の場で指導しやすくなる
・多文化でも共有しやすい（外国籍の学生）　など

学生への寄与

・就職以降の将来に必要なもの
・専門性を高める　など

その他

・根拠ある介護過程実践のための活用
・標準的な実践の取り組みの理解促進
・活用の想定は難しい
・多職種との連携に必要
・生産性の向上の視点を養える
・利用者の生活の質の向上につながる
・養成校と現場のつながりが強くなる
・現場実践への寄与　など

■アセスメント

介護過程教育の課題として最も多かったアセスメントに対して、LIFE の活用は多くの期待が寄せられていた。

ヒアリング調査において LIFE について尋ねると、情報収集対象である各評価項目や指標を真っ先に想起する教員が多かった。LIFE の各評価項目や指標は学生が利用者の情報収集を行う際の収集ポイントになったり、情報の精度を向上させることに寄与することが期待されていた。また、こうしたある程度定量化される情報が増えることは、その後に続く解釈・関連付け、統合化に進む上で取り組みやすくする効果があるとする声が多かった。

これまで定性的な情報に偏ってしまいがちであったり、ICF のフレームに収めるまではできても、それらの情報を結びつけることが苦手だった学生も、見える化された具体的な視点で情報を評価できるようになり、根拠に基づく介護に一歩近づける可能性が見出された。

一方で、利用者情報を数値化することや ADL など他職種の視点に偏重することへの危惧についても意見があった。介護福祉士の専門性は利用者の QOL やその人の望む暮らしに寄与するものであり、こうした専門性や独自性が失われるという懸念である。しかし、利用者の QOL 向上のために、定量的に得られる情報を適切に介護福祉士の専門性に引き寄せて活用していく

べきであるとする意見もあり、教育現場における LIFE への期待と懸念、教育での実際的な活用のあり方については今後も議論していく必要がある。

ヒアリング調査や授業視察では、学生の声として、LIFE の項目や評価基準がもたらす価値は半ばゲーム感覚のように情報を組み合わせていくフレームワークの要素があるようで、アセスメントという難しいステップを楽しいものに変化させているという話もあった。定性的な情報以外の情報を効果的に活用し、学生の苦手意識を解消するという意味でも LIFE の活用は意義があるといえる。

■PDCA

介護過程ではアセスメント、計画、実施、評価という一連の PDCA サイクルが展開されることが求められ、これらの一貫性は重要である。調査の中では「せっかくアセスメントで導き出したことが計画に落とし込めない」「計画立案した介護実践ではなく、自分がその時できることを場当たり的に実施してしまう」「評価基準が曖昧なため、計画と実施・評価がつなげられない」といった課題の声があった。こうした PDCA サイクルの一貫性を担保する上で、LIFE の活用は一定の効果をもたらす可能性があると考えられる。

LIFE 関連の評価項目や評価基準が、ある程度定量的で客観的指標として用いられていることから、アセスメント段階で得た情報が、計画段階での評価基準として位置付けられたり、その後の実施での観察・情報収集ポイントとして認識され、評価段階でその項目がどのように変化、推移したかを客観的に評価することができるというものである。

また客観的な評価が可能であるため、他の学生や実習先の職員や指導者、巡回指導にあたる教員とも、共通言語として利用者情報を共有することができるという点も利点として認識されていた。

そして、学生にとっては「なんとなく利用者さんが喜んでくれた」「笑顔になった」という評価から、「このくらい改善した」と明確に自身の関わりが利用者に効果をもたらしたという実感、成功体験につながり、介護福祉のやりがいや達成感につながるという可能性もあげられていた。

このように、LIFE の評価項目のように一定の客観性を有する情報を用いることは、これまでの介護過程教育における課題を解消する可能性があると考えられる。

■教育の方法や質

ヒアリング調査から、教育現場の教員は、LIFE は科学的に信頼された評価指標に基づく客観的情報が活用されているものという認識がなされていた。そして、客観的情報が活用されているために、介護実践の標準化が一定程度進むというイメージにつながっていると考えられる。標準化は、学生に一定の模範的実践、標準的な実践とは何かを伝えるきっかけになると期待さ

れる。介護福祉士が専門職である以上、一定の標準的な実践が求められる。こうした背景がLIFE への期待となっていると考えられる。

介護実践の標準化がもたらされることは、つまりバックグラウンドの異なる教員の教育の均等化にもつながり、根拠ある介護過程実践の理解を促進することでもある。

また、標準化された介護実践や、客観的な情報は留学生など外国籍の学生にも理解しやすいものとなり、昨今の養成校が対峙しているいくつかの教育課題に効果をもたらすものだといえるだろう。

■学生への寄与

LIFE は今後現場に浸透していくものであり、また、社会はデータを用いた科学的根拠に基づく介護実践を求めてきている。このような認識も教員の中にあり、LIFE の活用がもたらす効果を学生の就職や将来に見出す意見も一定数みられた。

「現場で使われるものならば使いこなせなくてはいけない」「知っていれば就職で有利になる」といった声から、現場で必要なものは学んでおくべきという思いが伺える。また、様々なデータを活用して、介護過程を展開すること自体は学生の専門職としての力量を高めていく上で重要であり、今後はそれが当たり前になっていくという認識もみられた。現場で取り入れられるものは学生のうちから触れさせたいという思いが、教育現場にあることがわかった。

■その他

LIFE を活用した教育を受けた人材が現場に入っていくことはすなわち現場実践への寄与、利用者の生活の質の向上につながるという考えがみられた。また、共通言語がもたらすものは多職種連携や介護職チームの充実だけでなく、現場と養成校のつながりを強める効果も期待されるという意見があげられていた。

一方、LIFE 活用の効果について調査したものの、アンケート、ヒアリングともに「わからない」「想定できない」という声は少なからずあり、LIFE の理解、浸透が活用の大きな課題であることも見えてきた。

本調査研究からは、介護過程教育における LIFE の活用について様々な効果があることが明らかになった。これらの結果は、令和4年度社会福祉推進事業「科学的介護情報システム（LIFE）を活用した介護過程実践に関する調査研究事業」で得られた介護現場における LIFE を導入・運用したことによる介護過程への効果と重なるものも多々みられる。介護現場においても養成校においても、介護過程に LIFE を活用することに共通する効果が見出されたという点は大きな成果である。

③介護過程教育現場における LIFE の活用に関する課題

LIFE の活用は、現在の介護過程教育や養成校に内在するいくつかの課題に対して一定の効果をもたらすと期待されていることがわかった。しかし、LIFE の教育現場での活用については課題も多く認識されており、これらの課題に教員がどのように向き合っていくかはさらなる検討が必要である。本調査研究で得られた介護過程教育現場における LIFE の活用に関する課題については、下図のとおりである。

LIFE を介護過程教育に活用する上での課題

授業展開の課題

・LIFE の理解が必要
・既存カリキュラムと調整しながらの導入検討
・時間数が限られている
・理解を深める事例や教材が必要
・学びの環境整備の課題
・学生の習熟ペースに応じた環境整備
・LIFE に限らない情報も活用すること
・個人情報の取り扱い　など

学生の状況による課題

・習熟ペースの差への配慮
・多様な背景を持つ学生への配慮（留学生など）
・根拠ある介護過程実践に必要な基本的力
・利用者の思いなどを把握する力
・習得に要する時間的課題
・学生の考える力が育たない危険
・学びの環境における課題
・習得促進のための教材
・個人情報の扱い　など

教員側の課題

・LIFE に関する知識・理解不足
・LIFE の実用が未経験であること
・LIFE を知る機会や時間がない
・導入現場を理解する必要
・教員間での連携、共通理解
・LIFE を活用した教材づくり
・知識、教授方法の確立　など

その他の課題

・LIFE が広く認知され浸透すること
・介護福祉士の業務と LIFE とのかかわり
・養成校に内在する様々な課題
・実習先との連携　など

アンケート結果から、養成校の教員は LIFE について「あまり知らなかった」「知らなかった」の合計が全体で 58.7%であり、「説明できる程度」理解している割合は 6.6%にとどまっていた。介護現場でもようやく導入の途についた LIFE は、教育においては浸透していないことが明らかになった。これは本調査研究で得られた重要な知見である。

また、本調査研究から見えてきたのは、単に教員が LIFE をよく知らないというだけではなく、LIFE に対する懸念など、一面的な情報によって抱いてしまう印象の影響も少なくないことである。その印象とは、利用者を評価尺度などの客観的数値で測ることで、これまで介護福祉士が大切にしてきた個別性やその人らしさといった部分が埋没してしまうことへの懸念だと考えられる。

LIFE 自体がまだ現場に浸透していない、システム自体が発展途上であるという認識が教員にある上に、教育のカリキュラムなどに盛り込まれるなどの外的動機が無い中で、主体的に LIFE の情報を集め、現行教育の中に活用していこうという積極的な対応までには至っていない。このため、LIFE に関する基本的理解が十分でないことに加え、LIFE が利用者や介護福祉士が大切にしていることを置き去りにしてしまうものであるという懸念を抱く状況にあることが伺える。このような状況においては、建設的に教育へ活用を想定することは困難だったと考えられる。

しかし、前述のように LIFE に対する多方面の期待もある。したがって、今時点では、根拠に基づく介護過程実践を促進するために、介護過程教育において LIFE をどのように活用していくかを教員や介護現場などの様々な立場の意見をもとに検討・議論していくことが重要である。教授方法の確立や教材の開発はもちろん、LIFE を活用するならば、教育現場でも LIFE を見ることができる、触ることができる仕組みをつくる必要もあるだろう。また、フィードバックの活用などを教育に取り入れていく上では、個人情報などへの留意も必要となる。

これまでの調査研究において、介護過程の各プロセス、チームケア実践、多職種連携などにおいて LIFE の活用効果が確認されていることはすでに述べたとおりであるが、これは「介護福祉士養成課程における習得度評価基準の策定等に関する調査研究事業報告書」（平成 30 年度生活困窮者就労準備支援事業等補助金社会福祉推進事業）の中で述べられている介護福祉士養成課程における習得度評価基準としてのコアコンピテンシーに通じるものでもあると言える。今後は、本来的に介護福祉教育に求められる方向性に対して、LIFE をいかに取り入れていくかについて、教員の懸念を払拭しながら、未来志向で考え、議論していくことが必要といえるだろう。

④本調査研究の課題と限界

アンケート調査は介護福祉士養成校のうち「4年制大学」「短期大学」「専門学校」「福祉系高等学校」の4種別に実施したが、回答率がそれぞれ 8.3%、6.6%、36.4%、48.8%と福祉系高等学校が最も多く、短大、大学の回収率が相対的に低くなった。回答の傾向に一定の偏りが生じたことや養成校種別ごとの傾向を把握するということはできなかった。

また、先述したように教員の LIFE に対する理解が十分に浸透していない中にあっては、本事業の探索的調査としての位置付けにも限界があった。しかしながら、今後 LIFE の成熟、介護現場への浸透と共に、教育に LIFE をどのように取り入れていくのか検討を深める必要がある。そして本調査研究で得られた LIFE 活用への期待と効果が、根拠ある介護過程実践を促進する一助になることが考えられる。

最後の課題として、本調査研究で得られた教育現場における介護過程への認識については分析していく中で「一定の共通理解」に収斂されていることがわかった。しかし、その認識につ

いて個々の回答を紐解くと、実に多様な言葉・解釈で表現されていた。介護福祉士養成校における介護過程教育の発展に向け、言葉の統一などさらに精査をすることが、根拠に基づく介護過程実践の促進を考えていく上で重要である。